

終生忘れることが出来ません。

人生の半分の終結

福岡県 佐々木 定 子

終戦、昭和二十年八月十五日、生涯忘れることので

きない、いまわしい日であり、また嬉しい嬉しい日でもありました。思いはつきません。ちょうど終戦の詔勅から五、六日たった頃でした。家の前の通りは、人っ子一人通らぬほどのたたずまいの中を突然、ソ連兵が十五、六人わいわいと私達の家のほうへなだれこんできました。私は子供達を三畳の部屋に押しやり、外から鍵をかけて炊事場に立ちました。外はただならぬようすです。いたずらにピストルを乱射する音、大声でわめくのが、おそろしく、炊事場に座りこんでしまつておりました。

満州の夜は早くいつしかあたりは暗くなり、子供達のことをすっかり忘れていた自分に気がつきました。

あわてて子供達の部屋に行きますと、二人の子供は恐ろしさ、ひもじさにつかれ、重なるようにして布団の上で眠ってしまつておりました。応召したまま帰らぬ主人、便り一つなく、どこでどうしているかもわからぬ主人を思い、昔の人が言つたように、一寸先はやみとは、本当にそうだななどと思ひながら、子供達におにぎりを作りました。

明けて二十一日だったと覚えています。隣家のご主人が裏口からこっそりと顔をのぞかせて、「昨日のソ連兵はいちばん素性の悪い兵隊で、勝手気ままに日本人の家に入りこみ、貴金属を奪い、婦女子を手込めにして帰る途中、運悪くソ連のゲーペーウにつかまり、その場で後手に縛られたまま銃殺され、今そこで後片づけがあつたそうですよ、見に行きませんか」と、苦笑いをして帰つて行かれました。そのことがあつた後は、ソ連兵は悪いと思ひこんでいた私達は、ゲーペーウの掟にはやはりきびしい正義もあるのだろうかと思ひをあらたにしました。が、しかしソ連はソ連でしかないようなことも起こりました。ある日の夕方、白系

ロシアの娘が私の家に飛び込むようになってきました。

「奥さん助けて、私こわいよ、兵隊裸にするよ、助けて、助けて」と泣きながら私にしがみついてきました。

うしろから兵隊が二人で追いかけてきました。私は、「日本語でゲーペーウに電話するよ」と、柱にかけてある電話帳をとっさに取って投げてやりました。それをペラペラとめくっていた兵隊は、きつとゲーペーウという言葉だけがわかったのでしょうか。さつと身をひるがえして、逃げて行きました。

翌日、またソ連兵がやって来ました。だんだんと落ちてついで度胸もついてきた私は、じつと立ったままで、二人のソ連兵の顔を見つめました。

彼らは押入れの前に立って、戸を開けた。ふとんを全部渡しましたが、まだ欲しいというので、隣家を指差して、手で追いはらうような格好をしたところ、頭を下げて出て行きました。が出て行った通訳らしい兵隊が後もどりにきて、一通の書状を渡しました。開けて見ると、会社の社長あてになっておりましたので、仕方なく私は近所の主任の岡部さん宅に持って行きます。

した。その夜、皆さそい合って主任の家に集まりました。そこで聞いた話は、近くに居を構えたソ連将校の宿舎に、日本人婦女子を相手に出せとのことです。毎日十人です。二、三日後、柳町の料亭の日本婦人達が、主任さん宅に来て、自分達でなければお役に立ててくたさいと毎夜五、六人ほど来て下さるようになりました。

将校宿舎には、すぐ近くの大きなお宅が接收され、来る夜も、来る夜も軍靴の音が凍りついた道の上を朝まで続き、将校達が大声で、話し、いつ消えるかと心細い夜が続きましたが、私達が無事に過ごすことができたのは、あの方達のお蔭と思うと、手を合わさずにはいられない毎日でございました。

二十年十一月の初めともなれば、満州の冬は寒く、つらい／＼毎日が続くある日、ポイラーが故障と言つてソ連兵達は全部、満鉄の杜宅の方へ引っこしていきました。引っこしていく時は、あちらこちらの家のめばしい物は全部接收と行って、トラックに運んで持って行ってしまいました。

それから間もなく、北風の吹き荒れる頃、八路軍が突然やって来ました。そして自分達が入ることになったので、立ちのくようにと言われ、いや応なしの言いわたしました。持てる物は何回かに分けて公会堂まで運び、寒さをしのぐことだけできたのは幸せでした。

私の主人は、大倉組の会計係でしたが、昭和二十一年五月、佐世保港に着くまで消息不明でしたが、昭和二十三年、シベリアの引揚げが始まって間もなく、小さな箱に入って帰って来ました。

さようなら吾亦紅

福岡県 吉岡百合

昭和九年十一月、亡夫立花達雄と結婚式を済ませ、満州国奉天市曙町に居を構えました。昭和十三年、奉天の大倉組よりソ連領が目の前に見えるような大城子という所へ行きました。日本の兵隊さんの町であり兵隊さんの家族が大勢で、たいへん活気に満ちており

ました。

大城子より小城子、綏芬河と、転々と移り、主人は忙しい土木工事に追われておりましたが、昭和二十年二月、二人目の子供をみごもっていた私を気づかかって、新京の叔母のいる所に家を見つけて、転居させられました。と同時に、叔母から、達雄さんが応召されたと告げられました。お腹の子供の名前も男子なら雄一郎、女子なら順子、と叔母に命名書も預けてありました。主人を新京駅に送ったのが最後の別れになるうとは。病院で無事女の子を出産し、産後の日だちも順調に家に帰りました。産まれたばかりの赤ん坊を抱えて、どうして暮らすのかと思うと目の前は真つ暗くなるばかりでしたが、叔母達の情が今も嬉しく、有難くてなりません。両親の愛情を知らぬ私は、叔母夫婦を自分の両親のように思い「したって」おりましたので、主人のいない日々を淋しい思いもせずに過ごすことができました。

八月七日、新京電電公社につとめていた、叔父が夜明け近くに帰ってきました、叔母に「軍のようすがお